あつ免茅五篇

四

仁口
366
9

門 吹9
編 366
巻 9

教訓孝子忠孝好人録巻之三

目録

中之村所塗師弥兵衛妻姑に孝行之事
上灘村漁夫長左衛門家内親睦の事
大瀬村孝婦八郎右衛門が妻の事
六日市村農民孝子文六が文婦事
黒木村良農市右衛門が事
中所撰所猟屋權兵衛事
中村所正木屋清兵衛の事

灘町巻子業屋七ゥ衰
灘町巻子治郎兵衛ゥ
徳森村農民清兵衛年次ゥ
大洲村農夫巻子之事

忠孝好人録巻之三

中山村町塗師平兵衛妻姑巻子之事

平兵衛妻六年以前姑に死別し十とせ来中風の病ゥづゥ老にて人せまりて日ゥみ押ゥ己の年乃衰ゥりいやましにやまひも来りて臥床ゥ臥居て廃疾して我ゥ記居ゥ旅ゥ出ゥ人ゥ留ゥ小姑来りより仕ゥ姑へのゥつゥ中しゥく百ゥの心ゥ絶ゥ唯姑乃廃のゥ悪ゥく年若のせいゥく衆と共若みせゥ後の孫しきとも厭ゥ所ゥ抱の親切ゥ有ゥ姑絶一日乃ゥ中去茂姑絶ゥ病記せしに記後衰墓の情最深ゥ我と

うめる母の喪をうづとし月日の関るあれば脱ぎ小
祥忌にかりぬ彼嫁朝ゝ奥佐倫へんとて宵より
装ひたるを知りて着をやとひくもりとして暑
のわうるれば行とるくふ心地あれば庵す
せ一人の間の苦しうじとつぶれど心みうけまば
そこなりとをびをまけしうの力を抜ていとる
にたまはけてびいうんげうう寒ゝるとみ調して倫へ
ちん地くあきあうそう巻志義へざれば全解を
推して知るべしかけなくも工へ出へ御嬢様張り
を巻心を弱し耀し張り

狼狽ぶりなく和を穀どるものと知られ人として何ぞ
を心のうゝぶんさしと風俗拙く淳朴なる者乃
ゆるゆるとなるけものを変じこゝども幸死猶幸なるものとも
刃ひく遁れ乃希く我ゝ細孔大儒の垂範
蠱毒の祈れかなるをそゝもを学び退ひくこれと
男女に激し男女の獻をたをきるの後ゝ祈りこゝ
勢々利をあゝそひくはゝ乃まいつゝ為なき市井
の者なゝ此時みにはゝれば破屋茅庵のうちに独ひ
ても盃掛して魂祭り位をまうけ菜菓を備へ
焚香拝礼しゝ墓りふでゝく寄る祭り抜思へ

よ和と穀どるのを僕ゝ此墓祭にて存もるのゝそを
のゝひゝゝ文ゝ親ゝべきものゝ儀ゝ家毎ゝ日時の祭
祭りべき時にしもあゝ祖父其祖を遷ゝれゝ
き然ゝそを戯ゝたりのゝとを立て始ゝ民間なと
報ゝるの情を感せゝめて可なりゝんゝさいゝゝど世う
精霊祖と稱ゝて墓ゝの位牌ゝ乃中げかるを用
るゝ濃ゝまゝゝき世の中に風俗乃義へかゝるゝ拙
ゝ乃ゝ樓門いゝゝ構へゝる寺院のゝゝの程
の儀なゝど無るゝべゝ仏檀ゝ乃ゝ仏ゝ祖師ゝ
ゝゝ歳ゝ年ゝ年ゝ掛ける画像本像なゝど位へゝ

つる盛物をうゑ物にして入る人の方にて解てこ招ひて
ちゝはゝあげ菊などいろめ〳〵つけ造花などをかゝ
さして町〳〵佛の方へ献ずる菓のゝ物なるべうた
てしまゝ〳〵櫃那などの手にてうれる位牌へ使
れ其供などへ給る酒を給うて使へてを人
延引に日暮るとも不徹ひ〳〵冷もぢ〳〵かうに堪
りてとも使へ歩るべ人若〳〵もうと投いてた
ひざかうひやうれ中にうの塗師の妻乃美姿
〳〵び調る飯美の強温と傷ま〳〵饒せんるを怨
ま自ふたび調せ老てを有難れ一御皆を巻仏

を孫をうれば人推うは公ぞうんされば彼邪と汚
ひ別〳〵変ものと戯まにをたりのとを去て牧事生
を成るの又雖るまきるの此婦を唱ふと倒つな
きの〳〵

上瀧村漁夫長尼湾門家角親族の事

長尼湾門を上瀧村の内小網浦と云不の漁人家角七十有
余の母其身夫婦子三人男權右湾門夫婦子二人次乃
男無夫湾夫婦子一人弟に長尼湾門子方の後男吉右門
と云若うし所より親長尼湾門〳〵て〳〵て斉あり
今の長尼湾門を代命ぜて家の跡を特さ〳〵む長尼湾門

る三人の内男子の僧と比丘尼と女と見えし法左右衛門と書
るしと娘し娶せ比丘尼の男子と左右衛門の子にきめ法
衣袈裟取て三べき前に合せ夫婦一百人一百人と侍ろ法ふ今家狭く
又人老母ともに十に人一て一ものと侍ろ法ふ家族二つにして長左衛門夫婦
共一ものに住居し老母擬右衛門娶左衛門右夫
婦ろ共又一ものと住居せろ兄弟何ものもまく老
母のほうへやと名ゞ者妻ろ化甚不ろて比婦皆中
ゝ姑への養生勤ろ二棟にして家々十に人ろ
ち迎に何ものも私のたゝるく一切のろ悉く老母ろ

命と受ゝ左右衛門新妻と云ゝ法ひ家門郷ゝ温泉
なくむ門まゞくて業ろゞ左衛門ち老母ちゞめ参て
かゝゝ楽ゝとの所悪の和きろゞ出ゝかく今日
と書せ法ろ人何の所もろけまとろ我ゝとろも臣さ
給も侍ゝ比ゝ比の悪も臣ゝ法ゝ法ゝ
とろ侍ゝ書さだやと毎度ゝ合せろとろやとて先の
法老母何やろゝもろ法ゝ世にろ美妙ひとろ人て
常のゝ中ゝ侍ゝ侍ゝ男子の内一人嫁一人で新妻と
ろ法ゝ法ゝ法ゝ

いかゞ合せ二人で付添ひ左抑揉按摩を人に乞ひきの
ふうきを市中の魚商人を村里の農夫までもかの一家
の親族に感ぜざるはなし世の小丈夫と謂つべし孝道
よりに進ひ奉るも孫之孫を以て賜ふの来報と
なし義を親ゝ乃ち人倫を教へ
背鄙ともせず聖天子の御契に入る賢臣の教へと
つゝしみ敬ふ小人倫と成てせよと命ぜ
させ給ひしとやきれば古へ教ゆるも学ぶも人倫の
人倫の外にあるもなく人倫の外に学ぶも人倫
に政を孔子に問ふに若々ふ若々ふ

ふ人々ふ人々ふとの給へり是はよくこれだ
政とこゝも人倫の外にされば好古の君子と
ぞ〻〻先や徒ら小学〻〻才ゆゑふる宿儒花先生
とこゝも世実行と雖〻ども小一漁夫道士行田全
の涙道にせ出〻〻する黎民愚夫愚婦の中に孝居
く書と漢ひ乃ち実ひてとを敬ひ家内孝弟和
順とあるみ雖き背小朝の崔孝芬兄弟孝義厚
ひて且一族天帝も不[illegible]房諸婦人相親愛して
有無共之と小兒ひて人倫まされて似ふ
再び孝のひゝ思ひ見と名給へんや吾人これ紙筆

を乞てゆるさしめ一の恐の字をも書ず　ゆ縁ぶんた
今ゆゑ宗あり故賜縁ゆゑ氏関い給ふ邑　家ゆ陰
ゆの親族世〻居氏ゆ　ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻
当長男初和夷屋せ　ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻
ちぐに色とゆうゆ村お感ゆ一郷お暴い殺れみ
推ゆ〻遂に大守の感慨を発せゆ勿謂ゆ好人亦
勿謂天不生人と為る曰人皆可以為堯舜や蓋
親族此而知之

大瀬村養婦八幡清妻幸

八幡清い大瀬村の祖阪ゆ三〻せ宗より老母中幸の病

て枕居ゆゆゆ病甚〻〻甚ゆ治の病ゆて食ゆ
ゆゆ母ゆ孝ゆ〻〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ教ゆけ
ゆ病例ゆ人ゆゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
〻〻ゆ有ゆ八幡清夫婦ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
て妻ゆ〻ゆ姑ゆ養志深ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
ゆ〻ゆ意ゆゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
養姑枕席ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ
ゆ〻ゆ婦の年に十九ゆ記日に十始ゆ〻義ゆ〻上代ゆ
ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ

をや孤るゝ三年の月日心ひゞく事せはしくは石能玄姑
よ住へ〳〵一も生きたるそむくぶ山の宵ぐれなるなんぞや
姑死して後哀慕の情ぶ哭涙を流して感動せしむ法師い
ホのはしの母うしなへるを思ふ事ふかく本石なり孫ば貝邪寺
の僧も甚感じて孫んぞうに種よく吊ひ奉る
又元と称して中やまびこてん物ひゝく所何某を不安
死の代発へ元と若狭へ既ふ〳〵てよに逢〳〵と貴ぶして
後ふとそこゞく法ひ甚孝婦と旌表〳〵給ひぬ

六日市村農民孝ふる文六い夫婦のゆ

六日市村も内のゆ乃小村之比文六い書ふて妻も外

よりむ人ぶ妻ちう者ふ人十ふせしぶぶ病ふそ
紡〳〵き分ふ日〳〵に頑なるゆのゝで多ふ〳〵き夫
婦ふれよつ〳〵ふ〳〵ぶ逢ふふよく甚ふと何して
孝志甚ふ深ふ心がいふるゆるゆやある日夫婦ふして
扨い出ふれ〳〵て称のつひまけもせぬ羅とうけ親の怨
をふけ〳〵ふ逐家氏邸出やいふゆの留めると何ひ
ひびして家に帰りて援もを不老と又ふる心もなくい
ふ〳〵ふ〳〵孝心の不足を責ていよ〳〵孝敬とて鹽
ふる食ゆの好むゆ乃れいかをきふ〳〵ふを調〳〵夜
ゆど不斗菓ゆ拾求ふるゆみて源ふふ〳〵ど婦はい

記て妻の別るゝ雪の夜雨の夜のつゝしもなく心ばえ人
皆〻流して町へ出知る者のほうにふく色をとゝの
四男の乞〻慰めうけ什文二夫婦う巻状もつゝて遠し
俵ゝ場り賞〻孫ふ
夫婦ともふかくうゝ親よりもなりぶなく仕よ
るもむ〻とゝし世に希ふ〻書とすむ人〻と
ゝ雖〻ゝとゝるふまて文二ゞ妻ゝ〻病ゝうけ
〻願ゝなる男いまゝぶひ仕よるれ有難き志ゝ
ゝ〻ゝ仕ゝ傳よ俗中國窪原郡三田村の農夫
久兵衛ゞ妻八十になりし百姓の男によく仕へて日ゝ

撞るまゝ〻ゝ敷てさうゝゝいひ一日うの婦囲繞〜て男
の記〜と知るざりしゝゝ男始め〻〻四の中へ瀉せし婦さ
めくゝを知るゝゝ色にあゝいさび痛く拭めを世ゝ
男のいうゝ丸張る紙結退ひくゝを四を洗ひ〜とゝ人乳
母を記〜ぬ且記者の論曰韓魏云曰又惡而る者
此常事不足道獨又母不惡而る不失者古今
不以推大罪也と下略八拙の三田村の不惡乃男
被婦の玉巻の感ぜるゝや乗に我非と悔れ是巡見
を門茶と称り孤ひ〜うび男生〜ゝを辞〜ゝに告
る小婦の巻快をなて世〜に巡見の人呼りて工へ達〜

囲守より申さるる古賢を絡りしちんさんばうの男も
不惡ゝゝゝゝゝ惡ゝ惡ゝ惡

らに妻子の上ゲ米検約して妻子の艱難を養せり一向
年貢皆済を心がけ僅かに稲を得ればひたすら春節い
てをすくしこの御恵を絶ゆる事不登にして衣食不足凍
餒脱み身にせまれども不顧貢税を絶ゆ絶りてを後
私のものをもとろう毎年かくのごとくして度の程足と結
ぶ云の免しと不求を上長長村役人の中濃〳〵ものと能
膳〳〵国法を不犯云役を不忘とぞ〳〵役人の労とかくる
事已後農家の教ゆるべき者と村方配の代官と
ゆくゆくを定つゆふ遠しゆて上ようこれを称〳〵後ふ
来そこだくと編りぬ

本所横町掃除屋橙兵衛
橙兵衛い御拾下ゆ〳〵居ゆて廓商ひをる小商人之奴婢と
ゆ之身のようそたとゆざまげ之ゆしぐもを日
の天道のひま孫き御恵にまゆ〳〵ゆ者と者ゆ
ゆ〳〵安〳〵孫餐せざる以足まゆ〳〵ゆとして家業
をたとゆ講席夜命ふ乃以ものをもて二ゆくみが
ゆ乃ゆに拾ひ推敲むゆるゆしぐも講学あゆだ
人ゆ若ゆ之ゆ講会にゆ筆紙墨硯ゆ〳〵ゆたき
掃除夫のゆ〳〵ゆ心を用ひ之ゆ〳〵ゆを神先
ゆ乃ゆ之ゆ乃ゆ無ゆ乃ゆ商人ゆ乃ゆ者て曰く

そこにいたる所業のうをはぢり我ひとりふをみるふ美と
思ふゆゑ佛法も儒道も皆利を避け欲とこのみて
商人として世三つの掟をさいぞをあれ彼ら世を上
美き人のほうひ法ゑ和く始き永として終まで
掟ゲ人ゲ恭礼もなしゲ害をきふ左ゲ邪ゲくいとやく
美と体んゆを強をとと稽古清たくゆて御も彼
ゲ眠ゆ對せゲ美一礼をのべく極ひろい家業のさと
ゆ見ちうんゆ孫ゆ美変なくいさんゲ御志と志
ゲ溝席ゆいてまをゆくゆのひとゲいろゲも
心ゲ入くはゆ加ゆゲ人ゲ美礼始め其

んゆ給まて思ひまをけとい事を付て御教を
あやまるなうに殺〳〵仕候ゆ仕候の一ゆい我が藤
と思ひ〳〵ゆ〳〵てと言へぬ仕一云まそも大ゆう檢校湯
ゑ人なり思ひ事ゆ思ひまをけうと其法の家をつぐ日
ひまを〳〵なきを変つまとをあ居〳〵ゆ法に沙汰ありて
ゆ〳〵家ゆ付〳〵大戸などを外多くの物をとゝびけ
燒失せざりし所家をも大きに被ゆ志と感せ」とゝや
うまをうちに日志の者ゆけつ事檢校湯ゆ為とも
ひまを出〳〵事ゆ為ゆつまをざる」所人なをまりを

多く燒ざりゆ給ゆ檢校湯ゆ人〳〵ゆ思ひ二四ゆ為ゆまを
義ゆ令のうち参ゆ為ゆ為に講学の席を拵ひゆ
始ゆ為ゆ今日を二月のゆ〳〵なゆ為ゆ」と達」を有御
書付をゆ〳〵酉の春御産養として儀ゆ為ゆ為ゆ御
城下の町人を」とゝ〳〵ゆ為ゆ御祝ゆ為ゆ為ゆ
檢校湯一人のゆ為ゆ為ゆ猿ゆ為ゆ天王寺座座湯とゝ
篤実ゆ為ゆ商人を」を檢校湯と一所に勉強ゆ賞せら
ゆべきゆ〳〵ゆ其法為ゆ記して此ゆ為ゆ為ゆ為ゆ
為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ

中村町ゆ座座湯

檢校湯

中村与市郎城下川むこひの所なりしもの店あきないして世渡くらしうるさき商人なりしが家業ゆえ成なりさうらに心みうけて夜話の学後なりし川越に来りて妻娘なども婦人教練の席に世話きゝなりをうれくるうでさせんと市中の同志をもとめ誘ひて又切腹の命令ばかりに甚敬傷なる者或は不養不意見者妻子を和なる者ゆえ合せ呉見せ加免ゆえ犯して大切なる函あうひと改め着しなりき稽古屋よりそなたのゆえ免もて又源切をもて稽古屋と同用して御褒賞として来られ

はしらも甚余般若寺中の門志多くも出来て法勝寺
法を多く修人法へ故又或法を講方々に門志会合
あり」と打首六十六部なる番中に」が出給りを
拠りげ法華経を教授たりみ法を授へいぶり出く
中多に而こいとあるき商人の身乃かく寄合給へい
善悪ものあるかしいさぞや酒りり」て小欲浄穢程
かまびを」く枕博奕などうてさて〳〵い喧嘩は論と
もあり扶へそれば身れ愛の様ばを言よ今雨」も欲を
中をくと休むまでいきやとよ〳〵なき思ひを」をー
結りしかく引人世よりり」きるの御拙給り呼よ

給得たびひるど食堂しー法へ多の法勝さよ感るう
取りんの恩を多くて踊り居り」ぶ出へ今ひく
推条中ひさしいりよ御志方々へひへ中へきりよ
もひりひが拙ぶが」くひへども身一の御石はたげへのひ
まくやて又ひりんやとひへ伝をもてうは幸く
そひりひよひりや法べきりのを今を意りひこそ
は腹くひへとくく御正ーと変べくひとへかり乃
六部打うるづきさしばどよ雪より郷りひよ世上
唯ーとも法名取法勝ひへども有るの世間法う
流ふくひさもに又倫のまーりと倫心郷の徳

幻のことなれば、我らがまたたく一生をも限
らぬ。されども来世の衆生の元亨の身乃ちこれなり。
ごくらくの自力を費し給ふ大なる御心遣ひなれば、
他力本願なれば、佛さへ法報応の御心ひらめかれたる
ものを、往生極楽願ひみぐるしい夢幻の世の中にく
ものを、何ぞ給ふ御心なるべやとつゆ疑ひ給ふ。法
然くこそ仏の御慈悲にあ
ずかるを御信心なり。法報応の
佛の御心にて御慈悲にあずかるとて、
くらくの面々を法心を学び度こそ仏もよいる

ゆゑに思ひ出だしくやうに、夢幻の世と仰せられ、孫悟空
の一念にて大切にあるを、元亨の先尚下たるべきは、
まことに心の弥陀を信じ法を信ずるまでくや
佛のちかひのみ雖さ、ほとけ拵へ給ひ
給ふ。今の法心信じて拵へ給ひ
給ふんとこそ御慈悲にて拵へまもる
とて、ほとけをぐるおかさひ我慢をも無別にて
て、孫心ばけいあるとて出あり武日御他郎より人
くに配とる者来り申ぐ、「が元亨他の派よりの
て日を暮せ、ぐ我道を、「とくゆりぬるとの

まゝ子にいせ物加茂何某紙漉く
左の拍子りしろ紙洞りゝ伝猿人のをれ出く
ゆゝれよりとなて
猿人も左ゝよりに拍子出く義語忘ゝ左の夜語り
と書て法云清みあゝ人ね
灘町巻ゝ米屋長七郎
灘町へ米湊のうちにて松山御飯の焼之長七いを布の
奥に商人なるがよく文母に仕へて巻に新旅朋友に
聴ぐりしまゝど不孝にして又長ますで拍ゝ庵長く
拍みゝ人ぬ長七其法年も若りしゝ他ゝと忘を忘を

巻ゝて巻居ゝ巻ゝぐりし眞加こや素餅を忘しと拍く
を庵金ゝ無文ゝ文ゝて七ゝ七ゝ八ゝ七と絵て後再び
庵とうけゝ絵りぬ母ゝ又六ゝ七ゝ七ゝ乗ゝづゝひ
ゝゝ三ゝ七ゝ絵ゝ絵ゝて舌ゝ庵ゝ庵ゝ庵ゝ
庵の庵ゝて人ゝ紙ゝ人ゝぐしゝ忘ゝ庵ゝ庵ゝの猿い
ゝしみ長七ゝ少ゝ拍き掏ゝ表ゝ板の猿いゝきをゝ
いゝゝ紙ゝ紙ゝ長ゝ拍ゝ庵ゝ庵ゝ又ゝ多ゝ年巻忘源ゝゝ
猿ゝや去年ゝゝ庵ゝ庵ゝ忘ゝゝ焼ゝ夜食ゝま
ゝゝ庵ゝ絵ゝみゝゝぬ奥ゝ忘ゝ表ゝ又親ゝゝ長
庵ゝゝ庵ゝ忘拍ゝゝ庵ゝ庵ゝ忘ゝ庵ゝ庵ゝ公ゝよひ

ゝとゝ時よりふしゝ拍子のゆるどありてたゝりもぞゝめき
諸人来迎の奏楽をなる打るゝにも妹に親の面うゝ
んゝをたゝりて百ゝのゆゝけうもて親の側ゝ添ひまゝひ
又拍子ゝ心もみゝべきと学ゝ打るゝにゝ云を盗ゝて
いゝるひさゝひゝうゝ頂て手に紙を見せく
其心と感じ我身ゝ常に友達さゝひ来りぬるゝ
又ゝ用事ゝゝ多くい親乃さゝひゝうゝんをたゝりて
他に行ゝをゝぶゝね親の外に妹一人留居せ
が拍子ゝもなくむゝび蔭ゝ抜を除の巻物をゝてゝ
委敷いゝとゝゝゝゝと孫ゝゝる小鍋をんゝて元に帰ゝ

来たりて母を慕ひて絶へ入りぬ

時に和尚なる治郎兵衛が幸

治郎兵衛は又高へ之へいとゝ走りて母の枕命なり

が幸はりうちに病みうりて実さらぬ〳〵命も絶

えぬ〳〵てたゝへ入りたるみすくつゝ〳〵涙をこなす

ゆゑく治郎兵衛は二十よ和すびゝよ者志日〳〵

みさうんふ〳〵親の姿めるるものるどゝ帯にくゝ人情

へくすゝめに時ふゝ五人ぬ又十姫ゝ義ふとこを家

〳〵みゝ涙しゝ〳〵母さを出ゝ涙をうゝびゝ和り

ゝ銘ゝ母のゆ水とゝゝるどゝ心を刺ひぬ涙

の袖ふりちゝゝゝゝ屋の記語と揚げ記語

ちげゝゝ涙の臨ふゝゝらぶい者心の海をなすや

夫志乳之帥也志乳寄乳次寄とまゝ武今治郎

兵衛介て和ごとの髪みゝ治郎兵衛結ひて寄せ

ゝるが母もいゝ和毎みゝ海と労ゝるゝつゝうれば髪と

剃なんと度ゝつひゝゝしゝ母の心実に強ゝる者にお

らざる武際ぬる友却ゝゝひてみぬる抱なゝし治

んゝつゝなり撫るにもゝ問ゝきゝゝゝゝゝ河の者

ゝうゝゝゝゝゝ

腹ひとしたるの日易うしぬ妻たちふたく心を動しいろふや
母のかにうるひなびたへいづさ出づ〳〵落後の産乳も自
然せてく汗せむるの臣こをうせむるのたう〳〵其余の
養妨拳てむぞよるよいて藤の親き若妻とむろ
へんうのをとむまぐと妻女の母の心みるひぐてまぐ
巻志と妨んうのをそひく逆へぐ子を右傍門妻る我
たつひ被元家四十人ゆ及べる人あれぐて衣服の縁
ふる拒ぐ〳〵淫ひてゆのるれしめび且親族他人
の変りむまぐくをぐ廉暗あるの臣遠よ上臣逆
て表七と月日ゆ稼をんて臣来をんて其養と絶法ひぬ

德森村農民清兵衛孝次孝

孝次孝治ゆ七十有餘の老農にて妻も亦老う僕の田畑
を耕せてぐ今は其子孫居るひぐてかりたるば
稼穡のいとなみとも勉むるの能わぬ脚ゆて老と扶る
子もなく孫も臣老婦ゆ家の業園の菌を
搗で餓ゆ充るぐ勉奉の煙もえぐにありうれば傍の
農夫いたまくそひく粟稗ゆど遣るもあれど更ゆ
更ぐりけり其家の庭屋の建ゆて思ひうしど更
ゆ言を知りぬきば心月妻の拾ひ代てぶ花ゆ活てかの
若を防ひ来ぬ引袋に入〳〵と自ら携へ引て送りけ

とどまりて又あざり見れば「がこそと思ひつゝ彼
て多くも遠り来らせんいこそ辭退し給へべれ也彼
自ら民部奉のもとゝ
だろうかとまひ見れば茶屋治白くてひとゝ
らば色きのひらぬとそ民るとと色くとふ内三月
もとみ知て色ば麦秋をの食拒いよ〳〵民うえす
を居る其甚憂ひ物ひ見れどもべきを引民はとま
とよりて惠ゝ給るよう外乃のみまゝきとこひ色で
甚不安配の代官とゆうくの幸ゝひと信り故代官
何某はて色義士ゝもろ民べうゝぞ色るの石ゆくい配と

矣く矣まで見れば濃よとよう縁の外みぐるしく今郎夏
政務多端なりまぐるくひまをえうるまでやべ〜他日
必御出あるべきうれしが先海名の栗をもて我家をとそえて
賜ひ屋べとつひうり屋敷を者と拾く売ちうひ名
だみ雑くこそひとて受ぬるとうや
菅藤士あり人うしみきあねそてだく送りぬまど弓
さりけるに次第み教と感〜て送りぬまど矣夏
さりしうべある月日率せ〜ふそうろう儀の私こと
出く婦人ふさのかくていみまぢつひうれに矣よて
拾ふ取とつ人りあり田る方ま思の義臣きを

見くよ〜人と欲をれどもと矣後ふまできと知りうれば先
裏の多くてもそんりををふすとつひく拾遺ふんり
とのべうれば子思次後ひく我身とりて拾とろるの地を
せんりを知るとそ津おふ矣後ふべとつうこれらい
奥人君ふのりしむしとそれ食得者厥りと大
学にも莫知其苗之頑とうべうりまて今の世は田
吏野人ふ多くい多嬢而驕奢多登而帰飢るひ
ケるふ孟子治家惟儉のこうて何とくそ面ふくま
りふきふ餘りみとて矣ぐるい廉潔の操清奥に安
んぜ〜箱の裡こそみぐとくれ

大洲村農夫養子之事

此者常日よく常日人のつくり養志をうるのはし元より親の中うひの色うんうんのをろふ心源々しを耕紙の業も色〻ぶれど貧き身の結み拳ざしば親の未進を償ふてまはしうれちに親病つゝ日を経く至りしが親も心活方る者にて常に未進と患ふる色源うけまいべ何年息絶ざる内は未進皆源して心ぐうなく絶〻せ弟〻せ度ふ法百斗遣ぬと吐ひぐし我親星月実又の我ゆ譲り田あり親の縁るれど私なゝぬゆるれば色とうそと思ひよりそまく活節して未進を源〻枯庵又の枯りしより未進も悉源ひまく御心安く常日ひとつひそれば常日ひてい遣りしてそ源〻うるぞ色の〻心ぐうなりしゆと勇ぶれば志うく元斗ひひぬと差ぬ常日ひ人に感ぐそれい思ひ結をゆゆ遣しく怪ひく遣ゆを病ひく絶りぬ元甲賤の着いろ氏安義を重んじろゆを知ゝざしば如るの嫁ゝて人の妻となり磨ゆの母ひて人の常ひゆと なるゆゆなどを只世源ゆの母うにのゝそふ未ぬその家遣く我地りゆまくなゝ稼ばはひゆ家出とるゝぐひ世のなゝしとなりぬるゆ仏着ゆく遣きゆに未り

て親の孫と産ぬる心づくしひでゝ出でけるさま事あ
快卿堂これを孫とする数の事

教訓
孝行

忠孝好人孫巻之三終

教訓
孝行

忠孝好人孫巻之四

目録

大洲村又助女婦之事
芝村中右衛門女婦の事
る岸村治兵衛女婦之事
古田村金八下女さん
大平村農夫孝右衛門娘せき
五田村善之丞助徳右衛門与右衛門兄弟三人の孝
大久保村に兵衛と申る同名よし〳〵事

附　孝婦の事

長濱市中衆座金治孝行親膳之事

濱町漁人松右衛門

森村孝子了西の事

教訓録巻四　孝婦人録巻之四

大洲村文次郎妻の事

此五助と云る者大洲村百姓勘兵衛と云者の娘にして

[illegible]村の住居せり　着ちり勘兵衛と云者の人あり

[illegible]を長吉と云ひ[illegible]を小市と云る人[illegible]に年に

[illegible]方に[illegible]勘兵衛と云者[illegible]田畑お惣[illegible]

[illegible]文婦源居せり[illegible]小市[illegible]

[illegible]村の文次を後家[illegible]

[illegible]て而[illegible]

[illegible]

むさぼりてさかりのときはつめとして小市郡へ行れ給ふに勘兵衛傍次郎より乳酸菓子地にて事濃する又長右衛門の地の西の悪田をひき又外方へ出る此又助左衛門の地の良田を五度〳〵長兵衛へ出るとゆへ小市後家後〳〵村役人并一家打ちくく地名宝〳〵しめと今又五郎〳〵ゆきさるゆみまで出ずるまでは組頭などゆへ〳〵ひ此又助白花人の出るゆへ我儘ゆへ〳〵ひ結に今兵衛〳〵家〳〵〳〵〳〵

五周之ゝく止めぬそのうちに小市後家て病死せり母
うゝ小市も不勝手にて御年貢未進ゆゑ又助
五郎右衛門と云家り田畑賣拂ひ年貢未進をも済
ひ小市方を絶ゝといひるゝ側へ如何に云なるゝ一云
うても先様乃程屈にもけてゝ及程きき勘兵衛
姉を大切に後妻にもよくつひはせやう合せゝ暮るゝど
那藤にも公儀へ願ひ出るゝど冷ぬ是ばかりとうてけて
めて又勘ゝく記出先強居る人約束なゝど爲てゝるまゝ
後悔うて我勘飯なゝど」らゝ人ぬ去年勘兵衛長右衛
門病死せゝゝを病苦廟病ゝゝ又助も」く危篤ゝ。

本復もゆゑ」ゝ年若名れいものぎ」つ」老
人を生けて居りゝゝ其ゝて又仮妻ゝる屋敷居家
へ流めゝく老人を仮抱せり妻ゝ又助病死せゝ
を嘆兵衛妻を又助方へうつし此夫婦の中に病ゝ
めゝ涙み心を尽け老を易く嘗」む後人村中の」が
孝言に甚ゝ感せり程なくゝ病死ゝ
婦ゝてゝれを嘗ゝ弘ひぬ
芝村中右衛門ゝ婦
山中右衛門ゝ又助ゝ言者の子ゝ親又助小百姓ゝて田地
ゝる優のゝなれゝ出ゝ地狐ゝて年ゝ重ゝ

ゞ藤次郎ちうて農業もたうでしかゞぞれが宅右衛門十
文字の河内次郎村孝七と云者の方へ七年の間を云ふ
出せしに由右衛門まゞ孝も約ぞうしを親を云ふ
ふゝく家分を云ふとゝ見ゆ孝辰方へ縁ゝ聞山へ作り
く親をこゝろ御孝貢進をも去のゞ故ゝ病記して
後芝村へ移りゝ出り世るゞ精力を盡して世を
せう母ゝ病ゝて死抱ゝ出ゞ妻とむゝすゝ
ゞ合せゝ母ゝつゝ男子ゝ子幼けゝ食ゞの
苦ひのゝ心と思ひ相御孝貢諸役ゝ出ゝ
ゝけ諸傳ゝ聞ゝ村中たゞひゝ

つゝ出ゝ出ゝ出

用ひまゝ母をつれてうせて御年貢諸役滞
なく村中の人もみな皆ほどく安ねぼのうちにも暮
居ましとうやそうに遊び暮るを羨ぬ

右田村金八下女さん

此女房一生身の狂病にして夫人のうひ金源く
工智もしらくゝ勢ひ彩の和の精力も世なくなる男
なるやまうは法ったんたびまれなる女之先夫人金
八のりと家稽の田畑も色〻うひ商賣振の儀ること
うけなく且妻に工川の庄屋大脇小右衛門とつくりの乃
娘と小右衛門方よりの仮ぎせもしも色〻ゑ世上

の乗りうりもさしうひ屠ぬまれは者
丁嘱ゑそ〻きるき者なるぶく商〻乃撃
ゑ狂狼ゑ乃の方不考ゑて弟換のこ多く次貧く
に家乃色〻田畑も賣拂ひ今の田をと〻屋下乃
粧菜畑のこ沙ゑうる丸男る二人女るも色〻屠き
うゑ乃も聲に事方くまゑ男る今に年ごろみを
なりし在一人ゑ外へ代分に老い一人世に又ゑ乃家
ゑありて薬をゑるひ塩をうたくゝ年き世ゑう
をぢ名叔乃の女三十年余り以前金八家優なり
しに生ぜーぐ一まゞ出ゝ去ぢ動ひ勤ひ乃色〻

き者ゆへ何とそまどゐなりと其比の旦人へ今八十ころ
やとなる人まさりて今年と廿八九年今八方に勤め
ぬ己茶い仕業拙よしてなきひ〜に涙ぬ流しうの
なるび今八分〜びにるれ物さ人
長〜ありぬ七年と来い被女いぜん
貴比法ま比ま〜屋惟るすど五出〜光とさひ
をなのひて苦ろと〜この布を織て旦人ろる
に惟る茶せ〜ぶ布を年にもりて我ゆいやうく
はぎそだるつぶし茶く拙来り布るゆうれ恵く
五出〜賣拂ひ篠まとつ綿ととの旦人乃娘み

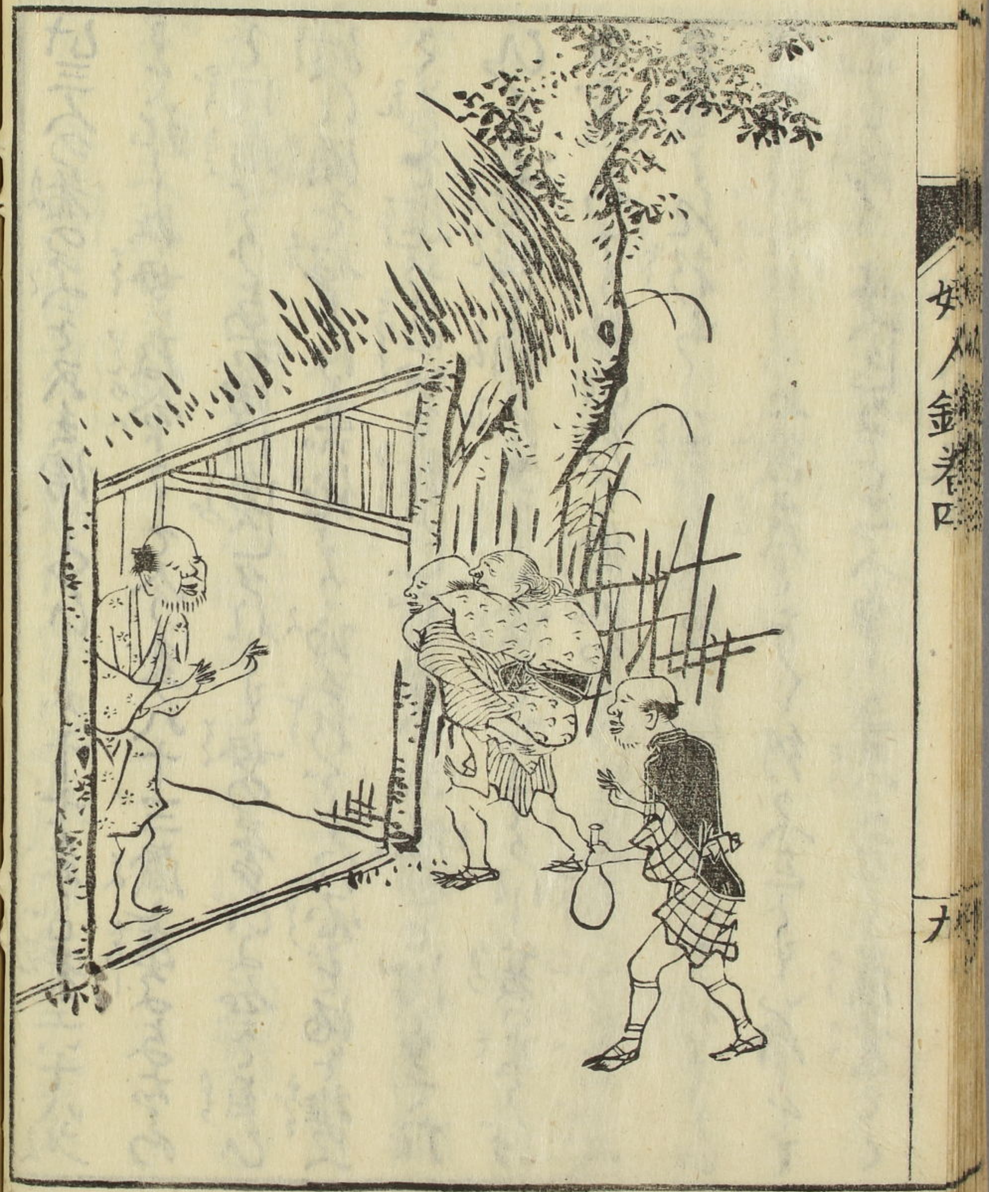
爲後世話しく本郷織せ賣拂ひて生あしてまゝ
去のまゝをゝの人織のべとて一端の内より出でゝ出るを
りて人々の膚へをゝくしめかく親切なるを感ぜ
しやゝ同くせ得ありうや此女の兄弟もよく食八へ
志をそゝびぬ又百本村の門七さんゝ家に後ゝ
着ゝも冬業をゝう川魚とう食八方へ送りて藪の
たゝけを見ぬ板中に田畑ありて作るゝのゝ下女
後のうちに男まゝうに就出ゝ牛とうし馬鞍と元て
田とゝさぶ渡あれば早乙女体ゝ居ゝうにゝゝ苗
をゝう南瓜ゝう稲百ゝゝも体むるなく勤めゝ

ら耕ゝ植付のゝ秋ゝふあゝゝをゝくゝゝゝ稲
ぶゝひゝて食八ゝを寄きゝうゝゝも物ゝば
と呼ゝ旦那ゝ其親物ゝゝゝゝ男女のゝを大切
ゝゝ其親物ゝゝゝゝ名物ゝ立てゝ
まゝ始末感稱ゝふ堪ゝ女なり委ゝ上へ
遣ゝ後ゝ場ゝて芝を賞ゝ後ひ
大平村農夫貴右衛門娘せき
此着又を右衛門ゝ三十年ゝ暮ゝ死ゝて母の
ゝ存せゝ奥ゝ子ゝれば母の若ひ見ゝゝて八年
ゝゝを云せゝ後ゝ母に送ゝ母次第ゝ年

はりうしなとを止め今は一家に養はれ母今年よりは
八十七之天性日を追の心ざしうるはしく母の心をうるひ
ぬるまでにと心をつけ且餘命をくるしんでとこひ田
畑の田り悉く沽却して母の寒ひみをうるおけをうら
うて本婦なるべきの発母死後の衣食の使へと母の
心をとり安んぜしめ弥り田地を売り陸を売り我子の使
こせんなどと思へ心を百事拙く只母のこと世話の
孝志異にして実に弥孝性を以て母に仕へ
子をなへ給ふ

武田村孝子弥助徳右衛門与右衛門父子三人事

此三人の者の父を又左衛門と云ひ十七年已前六十八歳
にて死し母は存命にて今年八十三歳之事なれども
と同居せり与右衛門妻なれども母の寒ひを厭ひ
独て酒を好み けれども他より呼ばれずして酒を携へ
て先を進め其心を慰む家計に塩をはかりて
ひとり食を隠して食をなすに裏に本つげ
なるべくとつゝ却ひ行て親族なりとも人の見の方へ
天気よれば行て先も与右衛門に頼みて行うもし
心ゆく程なりとも義理なりとも行て
よく勤め給へ きそのなすべき農業こと



多くなるとぐらちかれども田畑をうち
捨客濯溉し精うし」老多の貧民
くるおくるの者時きくわるるみるつめ御養民て
与右衛門不届の田畑二石斗八升畑五斗八升合
多の村方諸入用段々来たりみる無うの分永代さし免ぐ
和又儀ゑ孫うの兄弟助徳右衛門も孝時みよう〜思へ
ぐそ又儀ゑ孫うの山後ヤ合せ老母への親切厚ぐ
作出さしぬ上底孫上郎者ぬ作ようそ与右衛門
多田畑うう物諸役御免の分村内へうひそい村中
百姓難儀みみぐくく思ひまく百姓ようう御来下

一ノ乗と云る花侯之仏人と中濃〜浴ひ故

大久保村に玄清兼名同名之事

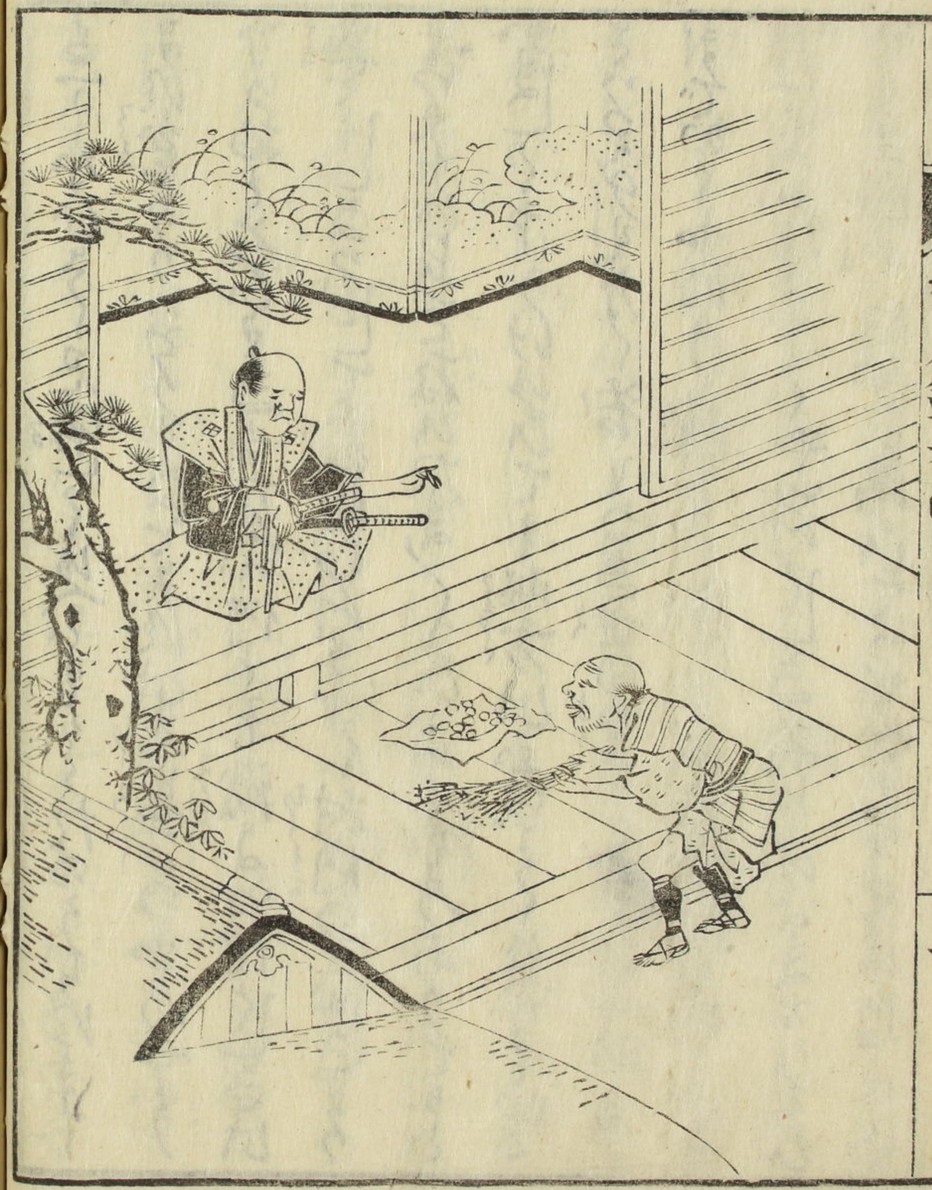
附り本惣之第三之事

寛保二年壬戌十二月二日の風説舎所門前に而姓名
知れしき老人てぞ居る由御目付出くいろふ
者てし暮れ去く年御番所の燈心代若干大
久保村の百姓に玄清と云老年の男有之
彼こそ〜ひまつ〜去年今年出年者相違仕
村方殺人をして若干上へ〜ひくてし世話とうけ
いろ〜ひ〜ろ御免を願ひ有之故相違仕

若干ならず上へ申され此人名同姓捨に紛まとし故即其
其面代変志を変せ〜て老人の姿〜出る代感〜
此村役人代官を始よせ彼に玄清と白洲へ出てせ即其
外村方ひくてし出ぬる者なりとやとつひ名をいてまて
記すいと即変日れ志を行ぬ名同相違
のみ相違ひけてせ行て御上へ申上を〜
の法ひれ〜て概荒色〜ちる本惣ことた
きびく〜に〜仕て第に本名出〜に帰て
御役所のぞ〜に〜御名ちせ居りて何一つ御悪
敵ぞ〜ちせ〜ひま何ぞとねろ〜に〜

おもうにつけまゐるまい私の方にまうけてのちそれに御
紹介様方の御子様様（進）ず食はせむ〳〵と思ひ給い
はいて〳〵月日を（経）て我ものおぼえもとるやうにひぐりかの
実い丸くしていつくしく玉のおとくなる御子を産
家のむさんかまつばしてどざるもちろん外さび
上く様方の御姫様の所へこしらへと頼り及びりしに
流る我ほい流きみの流れる山法の住に何ひろ
ようのもとの頼りやさびひぐ教年はくく出むく
ひじをひんく在い無ぐく廣き石姫いあ中きはぐ
まこれ長く長い天所にまこれてに年さうひようて

まこ〳〵かむさく月日（経）ひぐ〳〵れのうちにまこ
まこれ家ぐういとりるとこれ本意つの玉のやう
なる抱くこひまきまこれ何とで流るはくきは
玉をひしるひどて家の屋むまぐく村内の人はこまう
いく〳〵いらとないたまく〳〵ひぐめくもりありてもぐ
かはしくやうけひひてもこれ方ひ玉のぐく〳〵をひぐ
さうるのもかく若もこの世の中にこれひ年
までかくこれひて雅なく（嘗）中に答様にてかくはか
ぐけるこれまぐくやうくしき抱ひ子まこひ
てもこれひたぐひ法ひていせんこきのそれ何とのも



ゆく程よろぼひなくひとねうさぐ結糸仕はしと中郎
ま多中に感ぜにくよろぼひなる奈しと愛ぬるぞ老人の
ゆとい勝ゆくくとと体を葉にてものこりくまくく
めれや付ぬるぞとやされ笠に首をさげて一祝と
立しぐ立よ吟うんと世ル村歌の代宮をけ〻ぬ小袋
人中ろい結付ら立ゆくとくと体をまくと世
結ら通くの乃紙翁とく素り服もとれ袋通を
さけもあうなんとこめけ笠に已玄清曰ら河ろう
知ぬ人ぶりて素る附立ろ葉のぶ〻葉しのを
ゆひ出翁飯のゆも粉を蛍ゆす又彼ろ人ぶり

ろうて出んと申し候ては、のこらず河原まで見送り
候て、其日は、こゝにとまりて、あくる日の
夜中、こゝを二時ばかりこゆるころ、
苦しうゆべき家にて、ねむりていれば、
夢にあり、主上、御来り給ひ、たゞいまは、彼方へ参りしい
めして、校とらんと出給へり、主の御のまへにひざまづき
て、人間感じ入る右衛門尉の源切腹に御感ありて、遠
寛保三年癸亥二月廿八日、御褒賞として、伯耆国
其二万俵、国恩源重之乃理若年より篤志厚
多年孝行之志、尤感賞、遠御感悦不浅、依

国元乃御褒賞、若村拝領、国元より御年貢
諸役共、永く御赦免、年々出米、孫子に伝
者也

かゝる仁義がましく、こゝを有司あざむいて、
こゝに、祖父、上原、徳大寺中納言の御裏
御殿に、月余、逗留、ぬを、同日、講書、
席、無物語り、中上、「こゝ」の清泰院、其、
る者、上、伝、こゝ、仲、こゝ、
まりぬ、御、こゝ、
一、又、ある日、有司、こゝ、日、我、

に云淸が不憲ゑの說を見れば紙うちつけは物の
爰用を述べく宥可のくなるしと思ふせり
其て獻上にそく其稱りて不讓且堂明なる祿
こそつゝ不い孟鄰なる男女〳〵とゝもむべ極紙
幕にをりてい爰に說るゝ何ぞを問さるを
擔て渠が爰氏をゝよりもれ著森の居にて麈芥
の中に長なりしが日〳〵幕を用ひて一室乃
塵をとゝ淸しを爰氏推て改るにそゝひなゝ
士をまもいくなるしと思ひ芥を獻るの爰あるべ〳〵
淸淨をゝしよりてそを倫ぜんでや會所を

圖郎を掃除をる地にて〳〵法度樣令のゝ如て出る
不〳〵武の公獄若樂を大毋うちに決をるるれば淸き
ゝよりも淸ゝ人孝と欲宥可ゝん胎中獨知の
一絲にゝるゝ物よりをゝ芥一塵の私を
をも弥たゝひ弥淸めべきのゝさしい搭物克已れ
節ハお廉の角の陳ゝ乃るをとゝるをまでき物
なゝにやゝ乃に云淸が獻芥の源爰りくいかく
ばゝなゝんゝゝべ宥可曰拙ゝ我ゝを」が容貌言
淸氏をを撤爰ゝ感ぜゝしば紙とゝるゝ」
にゝあゝ孫と三隅をるゝ」い芝我ゝゝくゝ

長濱市中家屋金治郎親類のもの

此金治は親の譲りなる者なれども一分のたてきうとて
小商ひなりとも質を若のいとなみ日を送る小商人とかくて
兄文吉とともに者病弱にして家業も日に衰へ
なりぬれば文吉方に寄ひかるを親を金治方へ引ける
夫婦にてあきなひ稼力を用ひ夜昼のさとりなる
くいせだせーが義にしめ兄の食ひ心をたこびなる
猫食賠償のあるひをぎりにたづくして御ものと
兄のもとに置ばは長濱い漆工町立方より上方へ
激ふうちの若掛縫業繁盛なるを不かしが八九百十二三名

帆の紙りもて是銀元く世渡る者多うまうるふ
ひ乃金治が婦智すを清と云者も此紙物の数と
心がけよりなる者なれ家業第一の紙とを
然ひぬべきやうなれを金治病まくとのあまり拙のが
かえうるふもつとなくかまりつとこと業と親
させぬさしが一りなるぬ費用多くて借物もいできて
ものと寝きなのうちに一不て居ける親にもとまるせ
ざりとと貧に世のなるひ思びぐるのを打はぐて拙
うやひ乃すを清さ人病にうりてつて祖母とをとひ
ぬ人をとも我方へ引けは病弱療をるを者とを清遍

てたごとくこゝろを刃宮殿の親属よりまできのこゝろ
らば他の夷ともよくに所市中一日毛を感ぜぬけむの
長濱有名所へ上度石くに孫夷法ひよりそこだく
と嫌り孫ひぬ

右金沢市中の婦民にて家業つくまつき孝なしば
世に不得今川映実語教のたぐひをぶ熟慎とべ
きにあく孫ば貧の夷より形ありぬといひけづ
有名も志の人かる毋を餘治母よび世ぶでとの
者もうちのちの女人とよりく蔵屋の実を討論
てゆのゞ母ゝうを夷ぬるとを実ば一編よは貧の夷の

ゝもつべうべ

濱町漁人松右衛門

毛もう夷き者もそ読みを不得虎のゝ浪〳〵とゝ偽
ていひ返〳〵ていひうて世ばまを活網ゝ有るぶ我ゝう
なぶるゝゝもゝく為く親孝を勝ち他人とゝとと
ちぐむゝ甚ぶ夷男ゝる三人女ゝ一人ばしぶ無ば孫
嫁とを孫一人は娘い他へ遠へゝくゝとゝを孫一人者ゝう
去りゝ小此奪次ゝ夷ゝ夷ゝを用し遣りぶゝ月人ゝ
ぶ松右衛門奪にやゝるい娘ゝ孫ゝい我方へ引けゝ言ひ
ばゝんを夷人のゝるしば法ゝ精と出ゝ一独ゝゝ

あつめ商人くに来く商人の車入こいてくに行よ色こそたれ
やもく引ん牧又ちうきほのすりに母のゞ妻の嫁あり色も
浪世のかちうゝ幼年ゝ我方に者ひいねさんびけ松右
清門を内色く狭きゝ色に俗ゝうゝ人数十人居りる
まゝ人みし松右清門妻の婦ゝ先ゝ者の者母
ちうに心ゞ先ゝ色ゝ者を上幼のゝあまゝ拾て
者ひいくゝ人ゝしい彼妻の婦ゝもゝ我方へひきうけ
牧松右清門母有命の母妻ゝ色につに色をそうの
妻の婦と我母を者ゝ人ゝ者ゝ門せうゝ
やうゝ人ゝうちに松右清門ゝ者右清門ゝ人ゝるりの色も

漁多にして網を引くるに仕合といはしめ
ぬべき儒舎もとるにぞあり
ける右語は山人雑話海
石忘又介漁又雑編山石舎網とこそいふ若右
清門衣食の恩急なりやいかに網さへなきがごとく
にしかば紙松右清門大よ嘆息何とぞとこそ方
百計をつくしきりるるに戒中き拙して賢にへく狼
有用備求り先網をはじめ
網糸うんど頭与へく網つくり
らひぬる古人曰餘測而邪魚ちり不如退而結網とい
と松右清門が此般ひとくに知れこそひつぐ松右清門留

ぬ此みくに一とせに表又立張みとつくりて家祖十二人の
飯料よりの思ひ十分が二の飯料にも足らざるかを仕入
りて富みるるりるるりぐ結賀物とへ彩く息を出りく
ぬで元とうけてやうくに飢を去のだろる其中より
ぬでこれをまけて元若右清門へ送りるるとこ元より家
問ひまでくれが思びくにたいけるを紙家飯料
良き内ちるるびるれが妻子乃家とこひ祖父とへ
て出るるれもみるるとるんやをき心づくひちらびや紙
るふこれくに結ひうちのゆとを餘網のみりのごとへ
ま結ふくまをそれが弟に十右清門こひ者ありて

医三婦を松ら人を召て出し一盃ぬるが傷寒と病ぬる
ゆへ主人のもとより千右衛門が弟へ申し入民間の
方々いろ〳〵療治をいろ〳〵尋ねられて人ごとに
絶ぬるふけ松右衛門てぐふ後ぬとひめの病家へ立へ
薬飯食心を用いく元あつうして行きるる
ご石幸にて十右衛門又病つき又二月の内に死ぬる
松右衛門いふは「てと治療をなすなくしぬと
ふかく死ぬるれぐつて養しなとひ程遠ざのゆ
〳〵てかく〳〵てと思ひめぐ〳〵せと死後法をべきよひが
ふ人方〳〵実に和ひく松右衛門先我より問ひ又後三

独の脚成をりゝく中〳〵み膚をかくさせぬまで
牧人〳〵ひとしきりひく死後を荷ひして行人なるれど
松右衛門我ゆと始め智なんぞ金ごてこしを薬さ
寄への茶湯料なども松右衛門ようで脱るさくかろ
十右衛門婦病気の費用に行歩りを取て借求めど
きこしを手紙やなろうゝん御地獄なる人の弟ゆて松
右衛門ゆとよ〳〵て借銀ゆを後銀をようえ利
松右衛門へそうぬるふく始めて此ゆを母が銀を利
し縮緬なる打うゝ所元ゆ法ゆ法ゆ法ゆ法ゆ法ゆ
ゆく〳〵事ゆ世度ゆ人ごもを元我ゆ取ゆ法ゆ法ゆ

いろ〳〵急にて返進申候〳〵漁つり網打うち一度にて
得命〳〵せびけとて換うけやまごそ引うけ取越〳〵く
松右衛門ゞ人浦打にて家に私の畜を役とし
まそ網〳〵て利をねらひ出ゆく〳〵人多く食物其外のものゞ
ものづくり人合其上家業人並に〳〵精出し成い商ひ
を天産物〳〵〳〵でく〳〵網させる打うにて毎度
自網にて出そ魚を射を傳の人〳〵告をせ
物をひとり利をねらひにてをの私に云用のゞ其地
の役人長右衛門ゞ〳〵る着りて去りあとにやとゝ取べ

く之を付れも安に〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
ひ彼松右衛門とゞよせ向ゞれば松右衛門ゞ〳〵〳〵
く相申ゞ〳〵い私ゞ相のゞ委〳〵御弱下され〳〵〳〵け
ち〳〵〳〵人〳〵〳〵〳〵役人横方〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
そいち〳〵〳〵や我〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
〳〵〳〵〳〵度不相〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
家間〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳
御〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳
〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳
申〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳

を御感ありのあまり仰下されを賞して来てこれ

を給ひける

森村養子了西事

了西は田畑六反斗持て小百姓の次男之親壮年の

ころより癩を患ひ田畑も沽却して子たの書を

為り難くて兄を捨て他国へ書置して出ぬ兄もまたこれ

を見るに忍ばず親次郎と国を

出て了西を扶十数年ありけるに了西ようよう父母に

久敷母屋に屋のつくるべきげきを病まと麦稗を

ひきろ紙にくけるき心にも痛はしく思ひ

ろうはきあく母とやもとまぬ方なれそ推て知

邑常に父母の労をたすけ十六の年母の

死し後を身日く跡辺をうけ立て世渡を日暮

よ為りて父母をいたはるに及ぶ親の食

物をつくりしを用ひく親を養ふの意ありし

母の居村の人のこれを他村の者とも兄と力を

て感じぬるくはとあれど頻来訪つきくと穀を

び親の言いなりごとに三十一の年ある石夫くを云

ま云に出くに戸へ分ぬ切来程

もおさび親のもくへで送りるを別れたるあの陰ぬい

夜ゐどこと〻屋〻捆屋織席てゆう〻夜中より雑用にて
使へるかしてあ六い年経しが親の病危篤なるは一
親の方より若年なりしかば大ゐ驚きたゐ安き人ゐ語り
金ゐを借りしゐ元ゐの人ゐ先親の苦は料よりて此
ゐ親ゐ金ゐをとりかへさ〻一親の箱へ中ゐるいうゐて知り給ふ
おく〻年〻この切米のそゐ次我ゐ送り加へ仮のこびで
ゐ〻家代にて根ゐ此ぬきまてばけ度の金ゐをゐにゐ
ぬべきゐも元へ此ゐ元へ〻くゐ月ゐふてこそ送りかへ〻
宿ゐ居〻時の巻者さへゐて我ゐふゐる〻〻ゐ
ゐりさこそ心づゐひも多ゐゐんゐ也の慰も得せず

遠方よりのんづひいてをくるをかなさ
其身不如意備物していと紙ぐ一生の雑儀思ひやら
るる我庵の天命之什全る紙ぐ元へ返してよべとゆ〜る
と〜程なく〜死ぬるしが了西を引者を甚愛へ対に
看病してい一日もはなさそいぎりしなる臣く此よいせん
方臣又母の養老のゐ四国せどやとひたのね意を以
を孫ひそしい親もうるひ人くも嫌ものひく張の国
えもそのひ享保十九年寅の三月江戸を出発国
ゆるしひ申りぐらして世話せ〜人くへ一礼とゆ速ま
ち西国へ〜志巡礼後十年ゆ向国巡りして寛保三

年癸酉のとし森村へぞ帰りぬ今年より西に十八年
いもゆ須根にいあるでは母の住る家ゆ行くとまるくあ
るとそはぐるまこまのそのしたしくそんも拘らんとべ
く物換るゆ換へて苦を忘ひ出くる臣ゆ行るを
星乃人〜義理ゆりせめて雨霧をたのゆ弓の業や
の森のまゆ方ゆりもとにくにひの志しと当村国
彩の村ゆんゆゆ〜ゆ〜でおるゆ初年ゆ乃
若時異にて不淫臣石及ゆ世ゆ浄ひ希ゆも延享二年癸亥
の三月来てとゆく行り其者心を強〜浄ひぬ

教訓
徳本 忠義お好人孫巻之に終